http://homepage2.nifty.com/ueno-p-museum

パチンコ文化の意義と歴史を伝えるパチンコ博物館。さまざまな利用者に惜しまれながら幕を閉じた。

150種類のパチンコ台と、貴重な関連資料を展示している「パチンコ博物館」。これまでユーザーだけではなく、ホール関係者やメーカーの担当者、そして海外の大学研究者も来館した。運営開始から6年間で証明されたのは、パチンコが日本人の生活に密着した貴重な文化であるということだ。

150種類のパチンコ台が展示されている館内

過去の業界誌や遊技関係の資料も多数保存

パチンコはもっと研究され、伝承されるべき日本の文化。

東京上野の「パチンコ博物館」。昭和20年代の正村ゲージ手動機から、最新鋭機の液晶モデルまで歴代のパチンコ台が、ずらりと並んでいる。その数およそ150種類。同館の館長である牧野哲也さんが個人で所蔵していたものを核として発展してきたものだ。

牧野さんがパチンコに魅了されたのは小学校2年生のとき。デパートのゲームコーナーにあるアミューズ用のパチンコ台にさわったときだった。それから2年後、親の反対を押し切り中古の手動機を購入した。

すぐに飽きるだろうと考えていた親の思惑ははずれ牧野さんのパチンコ熱はどんどん高まっていく。台だけではなく、パチンコと名のつく書物も全て購入し読みふけった。高校時代には業界誌を個人購読し、新聞にパチンコの文字が載ればどんな記事でもスクラップしていったという。博物館にはそうした資料の一部も展示されている。

パチンコの神様こと正村竹一氏が考案した「正村ゲージオール10」

そんな牧野さんはある思いにたどり着いた。

パチンコはその歴史を含め、もっと研究され、後世に伝えていくべき文化である、ということだ。

「パチンコはコリントゲームに由来するという俗説があります。これは誤りで、正しくはヨーロッパで『ウォールマシン』というものがあり、それが渡来して日本に広がっていったんです。しかし、こういった基本的なことでさえ正しく語られていません。30兆円産業、ユーザー数3000万人と言われた産業の歴史変遷を語るものがないとはあまりにも残念なことです」

その後、牧野さんはホール店員として働きながら所蔵する台は増やしていく。家族の視線も気になり、保管のために田舎へ引っ越しもした。そんな中で理解者が現れ、2004年にパチンコ博物館が誕生したのだ。

海外の大学では日本を知るためにパチンコを学ぶ。

海外の大学では日本を知るためにパチンコを学ぶ。

「パチンコというのは視点を変えると、まったく違う価値や意義が見えてきます。この6年間でそれを確信しました」と牧野さんは語る。

海外の有名大学の研究者がパチンコ博物館を見学にくる。産業としてだけではなく、日本を知る上でもパチンコは外せない存在なのだ。その国で盛んな遊技には、国土や法律、気質や技術などが反映される。職人と呼ばれた人々が作り、今は液晶とＩＣチップ化されているパチンコ台は、日本の技術の歴史を映し出している。

館内に展示されている古いパチンコ台で遊技する人の中には「当時、自分がどこで、誰と、何をしていたのかが思い出されて、本当に懐かしい」と話す。パチンコが人生と密接に結びついているのだ。

もちろん業界の人もやってくる。今の若い開発者はデジタル機以前の歴史を知らない。どういう経緯の中でパチンコが進化してきたのか、それをメーカーに関わらずに見ることができるのは世界でここにしかない。古い新聞の切り抜きを読めば、パチンコが社会からどのように受け止められてきたのかも知ることができる。

「今、パチンコ業界も苦戦しています。でもこれまでにも何度も苦境がありました。その中でユーザーの新たな嗜好にあわせた機種が開発されて、盛り返しているのです。そうした温故知新に触れられる場所でもあります」

そうしたさまざまな意義を持つパチンコ博物館だが、残念ながら、平成22年12月をもって閉館することになった。これまで関係者の協力を得ながら、私設の資料館として運営してきたが、この不況下で維持が難しくなったのだ。

牧野さんはここにある資料は業界全体の財産だと考えている。いずれは公的な機関に全てを委ね、さまざまな分野の研究者たちが活用できるようになることが夢でもある。いつかその夢が叶うことを願いたい。

担当者より

パチンコ業界の地位確立のためにも必要な施設です。

パチンコ博物館
館長
牧野哲也さん

山下商会さんとベイブリッジさんの協力の元、施設の賃料の減免などを受けてきましたが、この経済状況下でそれもままならなくなりました。AJOSCの助成のおかげで約1年の猶予が生まれ、閉館準備のための時間をいただけました。業界の地位確立のためにも、これらの資料を残せる施設ができることを期待しています。